

私学こそ夢と力を

—— 母校の発展を願って ——

村木 宏彰 (新3回生)

石桜七〇年誌に寄稿依頼のお話があり、改めて校歌と応援歌の歌詞に眼を通してみた。

旭日ににおう桜花、其芽大地の深きより、出でて貫く花崗岩、郷の名所青春の、意気をかたどるうれしさよ、意気をかたどるうれしさよ。校歌の一番である。校歌と応援歌を、小聲で口ずさんでみる。懐かしさが胸にこみ上げると同時に、岩手中学、岩手高校生として過ごした六年間が、走馬燈の様に脳裏に浮かぶ。声が次第に大きくなり、気持ちの高ぶりを抑えることが出来なかつた。

私が岩手中学に入学したのは、昭和二〇年である。太平洋戦争の真ただなか。初めての登校日には、臍にゲートル(巻きゃはん)をつけて登校した。何かしら大人の仲間入りをした様な気持ちになったことを覚えている。食糧増産のための勤労働員、長期にわたる休講など、混乱期の中で、無我夢中で過ごした時期が過ぎ、学校に戻ったところ、校舎の所々に、生々しい米軍機の機銃弾の跡を発見し、

今さらの様に、我々の校舎が無事に残ったことに、ほっとした思いがした。

先生方の人数が少しずつふえると同時に授業の方も軌道に乗って行く感じてあった。中学、高校を通じて、多くの先生方から、ご教授いただいた。終戦後の混乱が続く中で先生方は、ご自分達の苦しい生活に耐えながら、しかし新しい時代を担うべき生徒達の指導に全力を傾けられていた。

一人ひとりの先生方は個性豊かであり、私達生徒に対しては厳しい中にも慈愛を感じさせる態度で接してくださったと今でも思っている。

敬愛すべき先生方には、当然のことながらあだ名をさしあげた。あだ名を持った先生方の記憶が鮮明で、あだ名のない先生の記憶が薄いということは当然のことかも知れない。

あだ名のいくつかを紹介すると「ペルシャ猫」「B29」「チャボ」「ロッパ」「ライオン」等…である。

お一人お一人の先生方は強烈とも言える個性にあふれていた。そして私は教師であると言う自負と自覚をお持ちだったと思っている。図画の先生は画家でもあり、生物の先生は生物学者でもあり、国語の先生は国文学者でもあった。

英語の先生は終戦後の混乱した時代だったにもかかわらず、英国風のジェントルマンであり、まことに厳格な師であった。厳しい態度で生徒の不勉強さを指摘されながら、時折、見せる笑顔は、今でも目に浮かぶ。後に第四代校長になられた山中先生である。

先生は敗戦による虚脱状態を嘆かれ、生徒達の無気力化を防ぎ、力強く生きる人間形成を願って、「石桜精神に返れ」と、ことあるごとに諭された。先生が教頭であり、英語教師時代に薫陶を受けた私達同期生は幸せな生徒である。

私は私学の中学、高校で学ぶことが出来たことに感謝している。私達の時代には、私学の伝統と創立者の建学の精神が息づいていた。その後、新しい教育関係法が公布施行され、民主主義教育がスタートし、次第に国内の教育環境が整備されると共に均一化が進み脱個性化して来た感じである。

教育についての専門家ではないので適切な意見を述べることは難しいが、私学は次第に本来持つべき建学の精神が薄くなり、公立学校となんら変わらない教育方針で運営される学校と化していったのではないだろうか。

私立学校法では「私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めること」によって、私立学校の健全な発達を図るこ

とを目的とする。」と規定されている。そして一方では公立とは財政力の差が大きくなり私学助成法で私学に対する助成が制度化されたが、それでもカバーし切れない財政力の格差に私学は苦しみながら次第に私学の自主性、独自性を失ない、合理的学校運営に力点を置かざるを得なくなっていたのではないだろうか。気になるところである。

独自の校風をかかげ、有為な人材を多く輩出した私学の功績は大きい。私達は今、改めて日本の将来を考え、次代を担う人材を育てるために、是非とも私学に夢と強力なパワーを持ってもらいたい。

そのためには、私学の独自性を十二分に発揮できる環境づくりに協力したいものである。我が母校の今後の発展を祈念したい。